

---

# 空色をかえて

shokocoa

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

空色をかえて

### 【Nコード】

N4803Y

### 【作者名】

shokocoa

### 【あらすじ】

ひっそりとファンタジー小説を読む事が趣味の鈴木美穂（主人公）が、同じ趣味を持っているらしい同じ学年の男子生徒から懐かれてしまう。しかも、その彼は端正な顔立ちで有名人なのだ。・・・そうして、主人公の平穏な日々が少しずつ賑やかになっていく。

## 出会いました

学校は楽しい。

適当に勉強していれば、どう過ごそうと自由だから。

「鈴村さん、居ます?」

いつものように自分の席で、親友と昼食をとっていると

「スズムラ」という聞き慣れた単語が耳に入ってきた。

自分の弁当箱や筆箱、さらには放り出したままの鉛筆の側面に

鈴村美穂（すずむらみほ）と書かれているのが目に入る。

ありふれた名字なので小さい頃から自分の持ち物には名前を書く癖がついているのだ。

という訳で、私を含めて5名のスズムラさんがこのクラスには居るので

フルネームで呼ばれない限り返事をしない。

だって、返事をして私じゃなかった！なんて恥ずかしい思いはしたくないでしょう。

そもそも友達が少ない私は親友の純（ジュン）ちゃん意外とはあまり喋らない。

だから”私では無い”と結論付けて、食事が続いていると誰かが私の前で立ち止まる。

「鈴村美穂さん？聞こえてるかな」

弁当箱から視線を少しずつ上へとずらしていくと見た事のある男子生徒が私を見ていた。

落ち着いた金髪で少し青みがかった目が私を映している。

えーっと、誰ですか貴男<sup>あなた</sup>。

この綺麗な顔・・・見た事はあるが名前を覚えていない。

微かに記憶されているのは同学年で、『喋った事のない人』という意味のない情報だ。

「私に用ですか」

思いのほか硬い声で返答してしまった事に、自分でも驚く。

いや、久しぶりに純ちゃん意外と会話するから緊張しているのよ。

頑張れ自分！と励ましながらぐつと顔は彼から反らさずに言葉を待つ。

「うん、用という程ではないけど・・・会いに來ただけだから。」

私の言葉に、困った表情をした彼はボソリと呟く。

「は？」

「またね、お姫様」

さらに意味不明の言葉を残して教室を出て行く。

「ええ？」

何あの人、電波でも飛ばしてそうで怖いんですけど・・・

未知なる物体に怯えている私は、クラス中の視線を集めていた。

純ちゃんは面白そうに目を細めて一言。

「どこで引っ掛けたの。」

「記憶にございません。」

ここ一週間を思い出してもあんな人と関わるような、特別に変わったことはしていない。

小首を傾げて私も純ちゃんに尋ねる。

「ところで、あの人は誰ですか」

\*\*\*\*\*

放課後、クラスメイトの視線を避けて辿り着いた図書室で私は読書に夢中になっている。

登場してくるのは妖精とか魔法使いとかドラゴンとか・・・とにかく現代社会とは大きくかけ離れたファンタジー小説というものだ。

幼い頃からこの手の本を読みあさり、今もなお熱中しているのだから立派な趣味と言えるだろう。

「あっ、うっ」

ちなみにこの呻く<sup>うめ</sup>ような声は感動したときに勝手に勝手に出てくる。

表情筋も連動しているのだが、そんな顔を人に見られるのがいやなので

前髪は頬にかかるくらいの長さで表情を常時隠している。

今に限らず私の前髪は顔を隠している。

だって、教室でも読書するのだから見られたくないじゃないですか。

呻き声はいくらでも聞いてくださっても良いんですけどね。

はふう、ドラゴンが騎士に倒された中盤まで読み終えて

私は前のめりになっていた姿勢を正す。  
すると前の席に向かい合うように人が座っていて、にっこりと笑いかけてくる。

「つつつ！」

驚きに声を上げそうになったが慌てて口を塞ぐ。

お昼にあつたばかりの人物だ。確か・・・

「相模さん？」

私が小さい声で話しかけると彼は目を見開いて、更に笑みを深くする。

相模聡（サガミサトシ）2年3組の王子様。女性に甘く人気があるが彼女はおらず、

彼を狙っている女性が多く存在する。

・・・ファンタジーでいうならドラキュラとか似合いそう。

うん、最後のは個人的な意見だけど。

「鈴村さん、僕の名前知っていたの？」

それが標準の表情なのか、彼の顔にはずっと笑顔が張り付いたままだ。

筋肉つかれないのかな？

「生憎ですが、今日のお昼に貴男あなたの存在を認識したばかりです。」

考えている事は言葉にせず私は応答する。

知らない人と話す時は、大体ムスツとした口調になるのは仕方ない。不安と緊張と、人見知りなのだから。

とりあえず、お昼にも言った台詞をもう一度。・・・電波な答えが返ってきたら逃げよう。

「相模さん、何か御用ですか。」

少し低めに声を出す。

こんな地味な女に何の用があるのか。

私は早く、落ち着いた世界に戻りたいのだ。

無駄に端整のとれた美男子が隣に居ては、本に集中したくともできない。

その証拠に、いつもは静かな館内がピンク色のオーラでも纏っているような

女生徒でザワツイているのだ。

しかも、視線が相模さんに向けられている。

明らかにこの甘くて落ち着かない雰囲気の原因はこの男だ。

図書館という聖域に、魅了<sup>チャーム</sup>魔法を使うような魔物はいらぬのだ！と心の中で叫んでいると、彼の指先が私の本へと向けられる。

「鈴村さんとは趣味が合いそうだから友達になりたいんだ。」

はてな？

この人は何を言っているのだろうか。

「僕もね、好きなんだよ。特に冴村っていう作家のファンタジー小説とか」

私は、先ほどまで『あっちいけー！』と思っていたのを一瞬忘れて目の前に座る男子生徒をまじまじと見つめる。

そして、

なんで私がファンタジー小説好きなの知っているの？という恐怖心と私も冴村先生好き！というの言った方が良いのか？という困惑と

この人は危険人物なのだろうかという猜疑心と……

「明日も図書室来るよね？」

彼が問いかけた事に気づかず、うっかり頷いてしまう。

「じゃあ、また明日ね。」

そう台詞をのこして図書室を出て行く彼の後ろ姿を私は頭痛のする  
思いで見送っていた。

「……明日も会うのか……。」

苦々しくかみ殺した文句は誰にも聞かれなかったはずだ。



## 出会いました（後書き）

初めての小説（処女作）で、緊張しています。頑張っ  
てかき終えた  
と思います！

## 出会いました1

三時限目が終わると唐突に質問された。

「その後は何もなし？」

眉間にシワを寄せて迫ってくる親友に、私は上機嫌に頷いている。

あの『お友達』や『また明日ね』発言から3日が過ぎた。

私は”放課後”ではなく”休み時間”を利用して図書室に行っていた。

なので王子に会う事なく、いつもの日常生活だ。

少し違うのは、帰宅時間が早くなったことくらいだが

「静かに読書ができて満足」

嬉しい声で宣言をすると彼女は短く舌打ちをする。

「ちっ！絶対に面白い事になると思ったのに」

「純ちゃん・・・」

私は苦笑しながら目の前の親友をみやる。

これといった特徴はなく、少し低い鼻に少し小さな唇。

切れ長な一重まぶたは冷たい感じはしないが、優しい印象も受けない。

岩里純（イワサトジュン）。平均的な日本人顔だ。

ただひとつ印象に残るとしたら、彼女が腹黒い一面があると言う事。

「だって、楽しい事には心が躍るでしょう」

真顔で語る顔に『楽しみの餌になれ』と書いてあるのが見える。

ので出来るだけ重く一言。

「純ちゃん、一緒に踊らせてあげようか」

彼女の眉がぴくりと動く。

更に言葉を続ける。

「渡辺先輩と昨日の夜、こ」

途中で台詞が途切れたのは彼女が私の口を塞いだからだ。

「・・・」

「・・・」

無言でお互いに圧力をかける。

先に動いたのは彼女だ。

「不毛な戦いはナシ！ってことで、どうでしょうか」

私は口を塞いでいる彼女の手をどかして「異議なし」と答えた。

たわいもない話をしていると10分の休憩時間が終わる。

変化のない日常は大好きだ。

次は数学かぁ。

このとき、一時間後には非日常になるとは知らずに私は安穩としていた。

「じゃあ、明日は46ページからだ。予習してくるように」

終了1分前。

数学教師の間延びした声を聞きながら、ノートを閉じて教科書ごと机にしまう。

この先生授業は、あまり人気がない。

黒板にビツチリと数式を書き込むからだ。

今は5月だが、2年生になって買った数学のノートは1冊を終え、2冊目に突入していた。

周りを見渡すとまだ写生し終えてない生徒が沢山いた。

皆の頭の上に焦った様子で『お昼休み!』の文字が見えてくる。

学校には大きな駐車場が完備されていて、お昼時間になると弁当屋が立ち並ぶ。

弁当を持ってきていない者が敷地外に出てサボらないようにするためだ。

チャイムが鳴ったら走って弁当を買いに行く者は多い。

勉強の時間に敷地外に出ようとすると、警備員が止めてくる。

この時点で外のコンビニには行けない。

(ちなみに強行突破しようとした生徒は学生証を提示させられ、担任である教師がついてくる。

もちろん担任は不機嫌極まる。昼食時間を削がれるのだから。)

という訳で、うちの学校では「食べて、遊ぶ!」という健全な昼食時間が主流だ。

「じゃあ、今日はここまで。」

先生が言うのと同時にチャイムが鳴り、お弁当という宝を巡る戦いが始まった。

「熱いですな。」

純ちゃんが感心したようにパチパチと拍手を送る。

「そうだねえ、がんばれ〜〜」

私は猛ダッシュで宝を追い求める勇者達に声援を送る。

私と純ちゃんは、毎日お弁当を持ってきているので不参加だ。

「では、いただきますか」

鞆の中のお弁当を取り出そうと前のめりの体制になる。

「鈴木さん」

何だか聞き覚えのある声が・・・とりあえず、お弁当とってからにしよう。

ゆっくりと鞆から目的物を取り出して私は顔を上げた瞬間に小さく悲鳴を上げる。

「ひっ！」

三日ぶりにみた王子は薄い笑みで私を見下ろしていた。

「久しぶり。図書室に行っても会えないから来たんだけど？」

ブリザード魔法でも使っているのではないかと思うくらい空気が冷えていく。

まっ負けるものか。

「そうですか、でも貴男に会う約束をした記憶はありませんよ。」  
「声が震えないようにゆっくりと喋る。」

「でも僕『また明日』って伝えたよね。」

伝えてきたけどそれが何ですか。

「私は図書室に行くとだけ約束しましたよね。」

ぴりぴりとした口調でそう告げると彼は目を細める。

ネコが獲物を捕らえる時と一緒の雰囲気だ。

怖い！何！？

「『また明日も会うのか』って言ってたよね。」

冷や汗が背中を流れる。

「聞こえて・・・」

あの距離で良く聞こえましたね。  
どんな聴覚してるんですか貴男。

「だから会ってくれろと思ひ込んで、放課後の図書館で待ってたんだけどね。」

まさか、休憩時間に通ってるなんて・・・ねえ」

最後は問いかけるように視線を向けてくる。

うう、私は手詰まりとなり謝罪する。

「すみません」

心が籠ってないのがせめてもの反抗だ。

「うん、じゃあ宜しく。」

「えっ？何を？」

私は意味がわからないという顔をする。

前髪でわからないと思うが・・・

戸惑っているのは声で把握できたようで彼が当たり前のように告げる。

「喧嘩して、仲直りもしたし。」

友人になつてくれるでしょう。」

それは遠慮したい。

と言いつうになつたが会話を聞いていたのであろう生徒の視線が集まっている事に気がついた。

特に女子の視線が刺さる・・・

「王子を待ちぼうけさせた上に断るつもりじゃないでしょうね」

という声が聞こえてきそうだ。

純ちゃんは、ニヤニヤしながら傍観を決め込んでいるし・・・  
考えるの、面倒くさい。

そう判断した私は溜息を飲み込んで「よろしく」と答えたのだ。

## 出会いました2

逃げ回った結果、（半強制的に）トモダチになった相模さんは男女ともに人気がある事を知った。

「頼む、バスケの助っ人お願いできないか！」

上級生であろう男子生徒から依頼があったり

「来週から調理部での試食会あるので先輩も来ませんか？」

下級生から試食をお願いされたりと、目の前の人物は色々な人から声をかけられている。

（命名）王子はその全てを理由を付けて柔らかく断っていく。

が、女子生徒は王子目当てのお誘いだ、簡単には引き下がらない。

「相模先輩、放課後の1時間だけでも良いんです。」

「ごめんね。僕もやりたい事があるから。」

「でもっ」

「ごめんね。」

しかし、謝罪の言葉で圧力をかけて遮ってしまう王子。

彼と知り合って1週間が経過している。

放課後の図書室で向き合う形で座って読書をするのが日常化し始めているが

優しく威圧的に断りを入れる風景も見慣れてきた。

そして、もう話は無いという雰囲気捉えて女生徒は立ち去る。

一瞬・・・睨まれたのは気のせいだろうか。



「読書中に騒がしくなつてごめんね。」  
女生徒が完全に退室したのを確認して彼が申し訳なさそうに顔を顰め、  
少しくすんだ青い瞳が長いまつげで隠れてしまう。

「明日からは、こういう事は無いようにするから。」  
その言葉を直訳すると”明日からも放課後に図書室で会う”  
ということに気づくが、逃げてでも無駄という事は実証済みなので頷く。

「そうして下さい。」

\*\*\*\*\*

ファンタジー小説で一番好きな所は、お姫様がピンチの時に英雄が登場する場面だ。

「あんだみたいな地味女、ただの遊びに決まってる！」

「相模先輩を独り占めするのは許せない！」

「ていうか、気持ち悪いし邪魔だし！」

図書室に向かう途中の出来事だ。

あまり使用されていない様子の資料準備室に連れ込まれ、数分前から罵倒されている。

女生徒三名。

顔を見ると昨日みかけた調理部がいたので、下級生だと断定できる。睨まれたのは気のせいでは無かったようだ。

鈴村美穂<sup>すずむらみほ</sup>ただいま人生初のピンチに陥っております。  
落ちて自分と言い聞かせ、どうしたら良いのか頭を回転させる。

この娘<sup>こ</sup>たちは王子に好かれたいんだよね。

じゃあ、私に突っかかるのではなく彼にアピールした方が効率的でしょう。

なぜ私に抗議してきたのか、わからない。

「私にあたる時間があれば、相模さんに会いに行けば良いのに。」  
思わず発した言葉だ。

次の瞬間、突き飛ばされて体が後ろに倒れる事に恐怖を感じる。  
幸いにも体に傷ができるような障害物が倒れ込んだ先にはなかった  
ので、

変な怪我もせず、体を打ち付けただけですんだ。  
頭を打たなくて良かったと安心したのも束の間。

「しばらく、ここに居なよ。」

リーダーらしき女生徒の<sup>こいび</sup>呟きに顔を上げると、教室の扉が閉まる。

まさか！

私は慌てて扉を開けようとドアノブに手をかけるが、遅かった。  
鍵が掛かっている。

そして遠くに走り去る彼女達の足音。

「閉じ込められた……。」

扉はひとつ、外鍵が掛かっついていて内側からはあけられない。

窓はあるが私の体を通るような幅ではない。

万が一出れたとしても3階なので死んじやうかもしれない。  
自力では出れない。

焦りながらも他に部屋から出る方法を探す。

天井の蛍光灯が目に入る。

そして扉の横にはスイッチ。

そっと押してみると、明かりがつく。

・・・夜になって、警備員が見つけてくれるまでの辛抱だな。

結論が出て、冷静になった私はいそいそと本を取り出す。

部屋の奥には使われなくなったソファが何個か置かれているので腰掛ける。

暗くなっても明かりは確保できているし、警備員の巡回も何時間か後だろう。

背表紙のざらつとした独特の感覚を楽しむように、撫でる。

「ふふふ。」

一人の空間で読書が出来るのが嬉しくて笑いが出てくる。

先客が居ると知るまでは・・・

「ねえ、何がおかしいの。」

背後から声をかけられて、驚きのあまり背筋が伸び変な叫び声を上げてしまう。

「ひあつ！」

「ふうん。可愛い声。」

声の主を見るために振り返ると、気念げに少年が真後ろで寛いでいた。

人が居るとは思っていなかったので私は驚きで動けずに居る。すると、少年が手を伸ばし私の制服を引っ張る。予想していない行動に体が反応しきれず彼に寄りかかる体勢になってしまった。

「温かい。」

耳元に低い声で囁かれて緩く抱きしめてくる。

呆然としているとゆっくりと首筋に顔が息が・・・うわ！！！！

「気持ちわるっ」

自分の置かれている状況を把握した途端に背筋に悪寒が走り、思い切り叫ぶ。

腕の中から逃れようともがくが微動だにしない。

「うわあ、傷つくう」

見知らぬ少年は棒読みのままゆっくりと体を離れた。どうやら解放してくれるようだ。

私は急いで体を離そうとしたが、腕をつかまれ距離を取る事に失敗する。

「そんなに慌てなくても、まだ何もしてないのに。」  
「何もしなくていいです！」

「ねえ、前髪邪魔じゃないの？」

彼が私の顔を覆う前髪をわけようと手を伸ばしてくる。

仰け反るように避けると鍵が掛かっていたはずの扉が勢いよく開くのが見えた。

そして、扉を開けた人物が私たちを視界に捉えると眼を細める。

「・・・その手、どけてもらえないかな。」

躊躇する事無く私を少年から引きはがす王子。

ここに閉じ込められた原因は彼の所為だという事は忘れていないが、見知らぬ少年から私を救い出す相模さんが救世主に見える。

## 出会いました2（後書き）

なんだか、話の収集がつかなくなってきた・・・？  
最後まで書ききるのを目標にがんばります！

### 出会いました3

手を握られたまま、資料室から足はやに遠ざかる。

「えーっと相模さん？もう平気だから。」

1階へと続く階段の踊り場にさしかかったときに恥ずかしさのあまり  
り呟く。

手を離してほしい。

放課後で生徒が少ないとはいえ、手を繋いで歩いているのは悪目立ちする。

早く距離を取りたいと私が考えているのがわかったのか、握りしめられていた手が解かれる。

思っていたより強く握りしめられていたようで、私の手はほんの少し痺れている。

手を動かして痺れを紛らわせていると、硬い声が耳に入る。

「鈴村さん、あの子達には注意しといたから。」

「・・・え？」

理解するのが少し遅れたが、私を閉じ込めた娘たちのことだと合点がいく。

どうやら彼女達は私を放置した後に彼に会いに行ったようだ。

そこで、どうやって私の事がバレたのかは気になるが・・・。

まずは、助けてくれたことと彼女達に注意してくれた彼にお礼を言わなければ。

「ありがとう。」

私が感謝の気持ちを告げると、彼は困った様子で小さく呟く。

「・・・本当にごめん。」

責任を感じている彼にしょんぼりと垂れている耳と尻尾が見えたきがした私は笑ってしまった。

「別に良いのに。ふふ。」

そして、一気に震えがくる。

資料室での出来事が脳裏に焼き付いている。

知らない男性ひとに抱きしめられて

「怖かった」

そう、平常心を保つていても怖かった。

閉じ込められた密室で、知らない人間に好きなよにされるのがとても怖かったのだ。

涙が出そうになり、慌てて目元をこする。

泣いてしまったら相模さんが困るだろうし、人様に見せられる泣き顔じゃないからね。

私は笑顔で彼と向き合う。

「うん、これくらい大丈夫です！」

「……これじゃ同じだ。」

同じって？

私の頬に彼は手を伸ばす。

指先はとても冷たく、そこから私の体温を奪っていくようだ。

彼はそこに私が存在するの確かめるように触れてくる。

「鈴木さんは……もっと警戒心を持ったほうが良いよ。」

哀しげな瞳を向けられて、私の記憶に何かかひっかかる。



こんな瞳を以前にも見た事がある。  
でも、どこで見たのかも誰が向けた瞳だったのかも……霧がかか  
ったように思い出せない。

「今日はもう遅いから、駅まで送るね。」

頬に触れていた手が離れ、王子は笑う。

先ほどまでの暗い気配は、どこにも無かった。

\*\*\*\*\*

誰もいない自宅に辿り着いた私は

いつものように着替えを取りお風呂場へとむかう。

温めぬるの水を湯船にためながら、シャワーで汗を流す。

さっぱりした所で、自分の太ももに視線を落とす。

右足の付け根から膝へ薄らと傷が入っている。

小さい頃に出来た傷らしいが、どうして出来たのが覚えていない。  
霧がかかったように思い出せない。

「王子の瞳を見た時と一緒……。」

もしかして、幼い頃にあった事があるのだろうか。

明日にでも聞いてみよう。

そして今日は、眠る前にあの本を読もう。

私が大好きな『月と狼』。

出会いました3 (後書き)

伏線を消費しようとしたら増えたり (汗)  
次話では必ず1つ以上は謎を解きます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4803y/>

---

空色をかえて

2011年11月22日01時16分発行